



我々の創造主たる神は、我々を生み出し我々を独自に発展するがままにしておいた。神の意志がどこにあるのかなど、私ごときが知れる話ではない。

私の両親は神様を信仰していた。流れる雲に神の慈愛を知り、吹き抜ける風に神の言葉を聞き、降り注ぐ日差しに御心を感じていた。

そのたびにひざまずいて祈りを捧げ、まだ幼かった私と兄に同じ行動をさせた。

「神様は必ず天の国にいらっしゃる、信じなさい」

優しいが力強い父の言葉が、風が吹くたび、雲が過ぎて行く度、日差しが部屋を照らす時、いつも思い出される。

父が言うには、神様は常に人間を見守ってくださるのだそうだ。ならば、神は無慈悲なのであろうか。

先の内戦で私は友人たちをたくさん失った。共に酒を飲みかわし、小さなバーで、ぐでぐでんに酔いつぶれて笑い合った、かけがえのない友人たちだった。無知で純粋で間抜けな青春時代を歩んだ友人たちは硝煙の向こうへと消えて行った。

私の目の前で死んだ友もいる。私は自分が生き延びたことを恥じるほどに悲しみに暮れた。

両親はお前には神様のご加護があったのだね、と生きて帰った私を抱きしめながら喜んでくれたが私の心は晴れなかった。何故、友人たちにはご加護がなかったのだろう。

彼らが死んだ後、生き残った仲間と私は浴びるように酒を飲んで追悼した。そんなことしか出来ない自分が情けなくて、泣いた。

戦うといったところで、生まれつき身体が細く出来ている私は戦力にならないと常々思っていた。事実、戦場でそうであった。

周囲の人から見ても、両親から見ても（気遣って口にはしないが）私の身体はひ弱に見えているに違いない。

原因は私の隣に立つ兄の存在だ。兄はまるで岩から掘り出してきたように荒々しい逞しさを持っており、髭が生えた顔は威圧感を放ち、内戦の際には鉄のような拳で相手を殴り斃したという噂がある。勇士として周囲から尊敬されたようで、兄は有頂天で戦争から帰って来た。私とは正反対だ。

相手を殴り斃したという噂が真実だろうと私は考える。山裾にある我が家の農場で、弱って手の施しようのなくなった牛や羊を死なせてやるために、兄はたびたび拳をふるう。

情け容赦のない鉄と化した塊は、牛や羊の脳天を直撃し、痙攣させ、終いには動かなくさせた。あの拳を喰らっては人も動物も生きてはいられまい。

兄は内戦のことなど、まるで気にかかっているようだった。戦場での話を平気で食卓に持ち出し、自分の武勇伝を自慢し、また機会があればいくらでも戦うだろうと言いのけた。

足元にかつての友を踏みつけて生きているという事実など兄にはどうでもよいことらしい。

幼少の頃から兄は自由に生きている人だった。学校の友だちと遊ぶとき、兄はいつも自由奔放に振る舞い、相手の都合など考えなかった。

戦争ごっこをする時は毎回のように自分が大佐をやりたいが、遊び相手を平気で馬にして走らせた。横暴な行動ばかりだが、兄はケンカになれば遊び仲間の中で一番強かったので、鋭く人睨みすれば逆らえる子どもなどいなかった。

また、兄はケンカの時に相手を傷つけることを恐れなかった。いきなり全力で攻撃するので相手は反撃などする前に負けていた。

一度だけ兄と同じ年の負けん気の強い少年が兄にかかっていったことがあるが、勝負はあっさりと片が着いた。十二歳になる頃には、兄の筋力は周囲と比べものにならないくらい発達していたのである。

相手の少年は、遥かな力の差に負けて顔半面が恐ろしく腫れ、グロテスクな面相で気絶したまま家へ運ばれていった。死んだように動かない少年の体と化け物のような顔は、周囲の子どもたちに強烈な恐怖を植え付けた。

紫色に変色した少年の顔は今でも私の夢に現れて、私を怯えさせる。

少年の家へ両親が謝りに行ったとき、兄は食卓でのんびりと羊の肉を食べていた。

己の欲するままに兄はどこまでも自由気ままに生きている。

今も女が欲しいとなると街まで降りて行き何日も帰ってこないし、酒が欲しいとなると勝手に買い込んで樽をかついで帰宅した。食費が酒に化けてしまい、母は大変に悲しんだが兄はまるで気にかけず、ビールを飲み干していた。

父は癩癩を起して、ステッキで兄の腕を叩いたがステッキの方が先に駄目になってしまった。兄は父を蔑むような目でチラリと見やると、十字架を踏んでみせた。

ああ、あの時の父の絶望を兄は知っただろうか！

悲鳴すら出さず、嗚咽だけがしゃくりあがり、顔面蒼白のまま父は床に倒れ込んだ。そしてそのまま帰らぬ人となったのだ。幼い時から神様と共にあれ、と囁き続けた善良なる羊飼いは、息子によって信仰心を砕かれて死んでしまった。

もはや、山間を吹き抜ける風も、流れゆく雲の残光も、牧場を伸びやかに照らす日差しも、不信心な男を振り返させることは出来ない。

父が死んでから二カ月余り、私たち一家は荒れ狂う台風の中にいた。兄の暴君ぶりはますます高まり、酒を買い込み、女漁りに牧場を空け（私は年老いた母に手伝いを頼まなければならなかった）、酔ったはずみでケンカをした。その度に相手は半死半生となったが、誰もが兄を恐れて文句すら言っていない。

山裾にある我が家はますます、街との距離が遠のいているようでひどく寂しい日々が続いた。兄の暴君ぶりに怯えた村人たちは牧場へ来てくれなくなってしまっていた。

近隣の村に住む人々が牧場に姿を見せてくれなくなってしまっは、我が家の家計は厳しくなるばかりだったが、兄は平気な顔で家計を持ちだし街へ繰り出した。

いっそ内戦でも起こって兄を連れだしてはくれないだろうかとすら、信仰心に陰りのある考えまで私は催した。

もし、そうなればもちろん私も兵士として戦うことになるが、戦いの恐怖よりも脅かされていく母の心と父が遺した牧場を失う方が私には辛い。

牧場で肥えている牛も羊も買い取ってくれる人がいなければ、何の意味もない。父が墓の下で啜り泣いている声に、私は毎晩悩まされることになった。

過酷な日々が続き、私も母も次第に痩せ衰えていったがどうすることも出来ない。

ある日、戦いは起こらなかったが兄がよく行く街で殺人が起こった。遺体は顔をぐしゃぐしゃに殴り潰されていて、犯人は相当の怪力であると保安官は判断した。街の人々も同じ判断をした。

その結果、我が家にやって来るのは当然の行動だった。この周辺で兄の怪力を知らない者はいないし、気が荒いことでも有名だった。

母のもてなしを無視するように保安官は身を乗り出して、昨夜兄がどこにいたのかを聞いてきた。母は当惑したように、エプロンの裾を握りしめて石のように固まった。

私は自分の身体と心が凍りついていくのを感じ、確かに心の奥底までが凍る音を聞いた。口がずるりと開いた。

「昨夜、兄はいませんでした。私と母の二人きりで夕食をとり、そのまま休みましたので兄がいつ帰宅したのかは存じ上げません」

横にいた兄の顔色がみるみる変わって、私に飛びかかろうとしたが保安官が抑え込み、一緒に来ていた村人たちが加勢した。

「嘘をつくな、昨夜はここにいた！お前たちと一緒に食事をしただろう！お祈りをしないと文句を言ってきただろう！」

私は兄を見つめてから母を見た。哀れな羊飼いの妻は、斃れた羊飼いと 同じくらい青ざめている。

「来い！お前は死刑になるだろう！」

保安官の叫びが村人たちに火をつけ、兄を無理やり引きずっていく。抵抗凄まじく兄が暴れ、何人かが我が家の壁に庭に投げ飛ばされた。

私は立ち上がり、タンスにしまってあった折れた父のステッキの片割れを握り、兄に近づいた。

「嘘をつく者は地獄に落ちると父が言っていたぞ！お前は神様を信仰しているのではないのか！」

(神様は仰いました)

私は抑え込まれたままの兄に向かってステッキを振り降ろした。

(神様は人を創りだした時にこう仰ったのです)

鈍い感触がして兄の額が割れて血が噴き出した。保安官も村人たちも怯えて兄を離したが、もう怪物は抵抗しなかった。今までこの怪物が拳をふりあげた動物たちのように痙攣していた。死んではおらず、怪物はそのまま拘束された。

近い日に縛り首になることだけが分かった。私には何の感慨も湧かなかった。あの日凍った心はもう溶けることはないのだと、少しだけ哀しかった。

羊飼いの妻は良心の呵責に苛まれて死んだ。青白い唇で何度も何度も同じ言葉を呟いた。

「息子たちの罪は私が背負いますから、どうかご慈悲を、どうかどうか」

事件のあった夜、兄は外出していなかった。いつもと同じように酒を飲み、食前のお祈りをしなかったので母にたしなめられ、ひとりでべろべろに酔っぱらって私たちよりも先に寝室へ行き、そのまま朝までいびきをかいていた。

その夜、どこかで殺人鬼が人を殺していた。

殺人鬼が、今なにを考えているのか私には分からない。自分の犯罪によって赤の他人が縛り首になるのを幸運と思うのか、罪の意識に捕われているのか、私にはどうでもよかった。

私はただ兄が死ねばそれでいい。

遙か昔、アベルとカインという兄弟がいた。ヤハウェに捧げる供物で、アベルの方が気に入られたことに嫉妬した兄のカインは弟のアベルを殺した。

その後、ヤハウェにアベルの行方を問われたカインは

「知りません。私は永遠に弟の監視者なのですか？」と答え、これが人類最初の嘘となった。

奇しくも私がついた嘘は人類最初の嘘であった。全ての始まりだ。

私は永遠に兄の監視者でいるつもりはないし、保護者でもない。

私は知っている、兄の荒々しい心の裡にある優しさを。

口では乱暴ばかりだが、両親を深く愛していたことは、毎朝父の墓に花を手向ける姿から伝わって来た。牧場をもっと栄えさせようと良い種牛を探しに回っていたことも知っている。

兄の情愛細やかな態度に心惹かれている女性たちがいることも知っている。

だがもう血は流された。

アベルの血は大地を流れ、神に向かってカインの罪を訴えたという。遠い時代の後も、アベルの霊は天に向かってカインを訴え続けており、カインの子孫が地上から絶える日まで叫び続けるのだそうだ。

もしそうならば、アベルはまだ叫び続けるだろう。私はカインの子孫、人類最初の嘘で兄弟を殺し、血を流した。

(神様は仰いました)

(神様は人を創りだした時にこう仰ったのです)

—逆らうな、従え。

私の耳には確かに聞こえる。我々を創りだした神様が囁いている。

この世の影となる者を排除せよ、墮落した人々を樂園から追放せよ。

私は牧場という長閑な樂園から墮落した者を追放しただけだ。たとえ、カインの子孫だと罵られても私はたじろがない。

(神様は仰いました)

兄が今、まさに縛り首になろうとした時に私は胸の十字架を握りしめた。兄が踏みつけた、父の宝物である。

「逆らうな、従え」

私の眩きは群衆の声にかき消された。

## カインの十字架

<http://p.booklog.jp/book/25390>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

企画小説『hypocrisy』様参加

<http://nanos.jp/hypocrisyxxlie/>

表紙画像：戦場に猫《いくさばにねこ》様

<http://catinthedeath.web.fc2.com/>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25390>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25390>